●◆しゃばのしがらみを超えて、仏の願いに生きよう◆●

仏の願い

平成 20 年 西雲寺だより　秋号（8号）

報恩講のご案内

10 月 17 日(金)～19 日(日)

17 日 ・・・・・・・・ お逮夜(2:00～)　お初夜(7:00～)

18 日 お日中(10:00～)　お逮夜(1:45～)　お初夜(7:00～)
└御伝抄拝読　└御伝抄拝読

19 日 お日中(9:30～)

法話 美浜 南 真琴 師 (18 日～)

18 日はバスが出ますのでご利用下さい。

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居経由
坪谷発(9:00)
常森発(9:00)～国見～鮎川～小丹生経由

おさそい合わせの上、
多数ご参詣下さい

報恩講によせて

「ともしびを高くかかげて
　わが前をゆく人のあり
　小夜中（さよなか）の道」

ある妙好人が深々と宗祖親鸞聖人のご一生をいただかれたうたであります。

親鸞聖人は九歳より二十年間比叡山で修行されましたが、悩みぬかれた末二十九歳のとき山を下りられ、以前より吉水でお念仏のみ教えを説いておられた法然上人のもとに行かれました。そこで今までの悩み苦しみをうち明けられ、法然上人の「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との仰せに深くうなずき「雑行（ぞうぎょう）を棄てて本願に帰す」と廻心（えしん）されたのです。ここに新しく生まれ変わった親鸞聖人が誕生したのでした。それは人間が自力でもって修行をして仏になっていく道ではなく、既に私たちにかけられているご本願を信じ、お念仏に生かされていく凡夫の上に成就する仏道に生きる親鸞聖人であります。以後弘長二年十一月二十八日九十歳でご往生されるまで、苦難の人生をお念仏と共に生きぬかれたのでした。

私たち、人間の知恵や分別で生きる人生は、まさに暗闇の中を手探りで歩いていくようなものです。壁にぶち当たり石につまずき、出口は見えません。そのような私たちにとって親鸞聖人の歩まれた本願念仏の道は、行き先を照らす灯であり、力となり勇気となって下さるのです。私たちに先立って九十年のご生涯をかけて果たされたそのお仕事の尊さを讃え、恩徳に感謝し報いるのが報恩講であります。

報恩講は皆さん方にとってなつかしい思い出があるのではないでしょうか。交通手段の無かった四、五十年前は数里の道を歩いてお参り下さいました。またその頃はご門や参道にたくさんのお店が並び、子供たちにとっては親からこづかいをもらって買い物をする一年で一番楽しい日であり、大人にとってはお初夜のお説教が終わると朝のお鐘がなるまで「やっさかどっこいしょ」と踊りつづけたものです。それらのことがなつかしく思い出されます。また報恩講は参詣の人々と親しく出会い近況を語り合う場でもあります。現代はお互い孤独だといいますが、それは私たちが仏法を求めなくなったからではないでしょうか。本当の友達は仏法によって与えられるものです。人生の苦労を語り、共にお念仏申す友達が一人でもおれば人生は賑やかです。お互いが御同行御同朋として集う場が報恩講であります。そしてその御同行の集まりのなかには必ず親鸞聖人も共におられるのです。御臨末の書に、

一人居て喜ばば二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり

とあります。私たちがお念仏申すとき親鸞聖人はいつも私のそばにいて共に念仏し、「お念仏と共に人生を生きぬいていこうぞ」と励ましていて下さるのです。

報恩講には、皆さん方にとって最も親しい「恩徳讃」のご和讃が、満日中に朗朗とあげられます。

如来大悲の恩徳は
　身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
　骨をくだきても謝すべし

このご和讃は親鸞聖人が八十四歳のとき、ご長男善鸞さまを異安心の科で義絶された、その悲しみのなかから正像末和讃五十八首をおつくりになり、その最後のしめくくりのご和讃であります。その中に「報ずべし」「謝すべし」と「べし」ということばが二度使われています。これは何を意味しているのでしょうか。決して私たちに如来の恩徳、善知識のご恩を報ぜよと強要しているのではないでしょう。私たちは自分に都合のよいことはありがたいと思っても如来のご恩を報じたり謝したりするこころは日頃ありません。そこに深い悲しみを感じます。親鸞聖人は如来の恩徳、善知識のご恩を報ずべき身でありながら、我も信じ人をも信じさせることのできない深い業を懺悔しておられるのです。その懺悔をとおして「報ずべし」「謝すべし」と我身にいい聞かせているのではないでしょうか。

『歎異抄』の次のお言葉が有難くいただけます。

弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、されば そばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ

（住職）

追　　憶

坪谷　近藤喜平（78才）

暑さ寒さも彼岸までの諺どおり過ごしやすい季節である
稔りの秋も終え、ほっとする気持で毎日がさわやかです。

こゝで曾祖父の事について少し述べたいと思います。今から148年前の1860年、江戸時代の末期、時の大老井伊直弼が桜田門外の変で、水戸藩浪士達によって暗殺された年に曾祖父は生れた。万延元年であった。

背丈は5尺足らずの小男だったが、よく働いて年中山仕事に励んでは、よく西雲寺へお参りした事を聞かされていました。

特に後斗院さんや荒川五郎兵衛さんの話を聞かされた記憶があります。

変ったエピソードもあった。「朝晩梵鐘の音を聞いている者はターンとあげませや」なかなか強引なところもあって結構有名だったそうです。

昭和12年私が小学校へ入った頃の憶えで、朝晩のお勤めに家族全員を仏壇の前へ座らせ、舌々正信偈の合唱をさせる。足がしびれても強制的？にお勤めの唱和。このような事が続いて私は12、3才で舌々正信偈を宙で憶えてしまった。それが後に正信偈や歎異抄などに興味を持つようになった原点かも知れない。

その曾祖父も若い頃より酒を好み、3日で1升のペースで4、50年続けたそうだ。「よそで飲んで帰っても又家で足量を飲む」と云う酒豪で、近頃問題の肝臓ガンにもならず、昭和24年11月享年90才の天寿を全うした。当時としてはすこぶる長寿だと思う。

我が家は昔から大家族であった。昭和15、6年から24年までは10人、一時期11人の大家族でした。そこで珍らしい事ですが、私は今までも、これからも滅多にないと思われる事に遇う事が出来た。それは昭和61年と62年の2年間、我が家には「祖母」と「母親」「私達夫婦」「息子夫婦」そして「孫の賢佑」（賢佑は61年生れ、祖母、母は62年往生）の5世代が同居した。大勢の方から珍らしいとか、おめでたいとか云われ、つくづく幸せな事だと感じました。

去る6月末に妻の13回忌、祖母・母の23回忌、そして白血病で21才で亡くなった娘の27回忌の法要を勤めさせていたゞきましたが、こうして勤まることも、家族みんなが元気で何の不足もなく平穏に過ごせるのも、ご先祖様のお陰と痛感しています。

今年もまた報恩講様の季節となりました。「牛に引かれて善光寺」でもありませんが、お手回しのバスに乗せていたゞき、みんな揃ってお参りしましょう

合掌

信心とは

本堂町　横山　安子

子どもの頃、生家では時々お聴聞と言って田の字の四間を開け放してお寺さんが見えてお説教がありました。その頃は今のように子どもの個室などなく、夏は涼しい縁側へ机を出して宿題をしたり本を読んだりしたものでお説教があるとその机も片付けられてしまうので嫌な思いをしたものです。少し大きくなると、何遍聞いてもわからないのか、ナンマンダブなどと唱えて死ぬのがこわいからだとか言って親を批判したものでした。

そんな私がある現実に出遇い、しかも不思議な御縁で仏法を聞くようになりました。父や母は私がまだ若かったからか、仏法を聞きなさいとは一言も言いませんでしたが、ある時、父が「すべてこのままで良かったと言える道があるんだが―」と呟くように言っていました。今思うに、これが仏法を聞くことを指していたのでしょう。御縁のある先生が遠方だったので、広島や京都まで出掛けて聞く事もありました。この時、父は舅や姑に聞法の旅に出る事を許可して貰えるよう頼んでくれました。父は私が聞法する事を喜んでいました。父や母や舅や姑、その他多くの陰の力のおかげで、仏法を謗っていた私が仏法を聞く身になれたのです。不思議としか言いようがありません。今までにお育て頂いた先生も父も母も舅も姑も今はこの世には居りませんが、私にとっては仏様です。

信心とは、一つには信知すること。まことにあきらかに自己を知ること。自分が煩悩具足の凡夫であり、この凡夫に如来の本願がかけられており、この本願力により浄土に往生するという事を諦かに知ることである。すなわち二種深信（機の深信、法の深信）である。

二つには信受。どのような自分もどのような現実も受け止められること（本願力の故に）

三つには信順。如来の仰せに従うこと。「我に帰せよ」「小さな殻を出て大きな世界に出でよ」との如来の召喚の勅命に順ずること。

であると、私は今までに教えられてそのよう

に受け取って来ました。けれども、頭ではわかっていても、やはり聞法すればすこしはましな人間になれるかと思う心があります。「私が聞いて」、「私が…して」といつも私を中心に考える自己肯定そのものです。そういう自分を知らせて貰うのが聞法の場だと思います。「自分がわかれば仏がわかる。わからないのは自分である」と聞いたことがありますが、私が私だと思っている私は、自分の目でみた私であり、仏の眼に写った私ではなく、仏様は、「汝はこれ凡夫なり」と言っておられます。仏様の眼に写る私、それを教えて貰うのが大事で、信心がどうのこうのという事は私の沙汰する領域ではないようです。

信心とは「鰯の頭も信心から」と言うような自分が信ずる心ではないと思います。

ある真宗の求道団体では、「信心獲得」という事に力を入れて、信心を獲得するために仏法を聞くのだと、信心を何か物のように握るような感じを受けます。信心とはそういうものではないと思います。それにもう一つ気になるのは、「破邪顕正」と言って他の誤りを叩く事に力を入れていることです。他の誤りを叩くよりも正しい事を顕かにすれば自ずから破邪になる「顕正すなわち破邪」ではないかと思います。他の誤りを叩く事は、仏の慈悲に反するのではないでしょうか。例え、真実の教に反していても、それを憐み慈しみ、どうか真実の教に出遇って下さいと願い働きかけるのが仏様のお心ではないかと思います。

自分が信じている教が正しいと思っていても、信じる自分が問題で、信心とは、これが真実の教、正しい教だと自分で信じこむ事ではないと思います。

もうすぐ西雲寺の報恩講ですが御法に遇える日を心待ちにしています。　合掌

本願の　うちにありつつ　うろうろと
信心さがす　我　おろかにも。

中高生からの「素朴な疑問」のコーナー　第2回 宗教って？

まず（その１）…
宗教の第一印象は？

「やばい」「うさん臭い」・・かな？じゃ仏教って聞いたら？「古い」「お葬式」・・かな？

それは当たってると思います。幸せになるとか、運気が上がるとか、病気が治るとか、願いがかなうとか、簡単に引きつけられるのは、やっぱりあぶないと思います。教祖の言葉が絶対とか、救われるのにお金がかかるとか、救いにレベルの差があるとか、他を排除するとかいうのもニセモノでしょう。TV のスピリチュアルは大丈夫？僕はそうは思いません。逆に、昔からある仏教が枯れ木のように弱々しく見えるのも、悲しいかな事実だと思います。

まずは、どんどん反抗しよう！魅力的な誘いの言葉を聞いたら、思いっきり引こう！簡単に頼らないで！

じゃあ（その２）…
本当に頼りになるのは何だろう。

自分かな？もうちょっと突っ込むと何だろう。理性？常識？科学？目に見えるもの？

みんな正論だと思います。これらが頼りになるから、勉強も商売も生活も成り立つんです。僕たちはそうやって暮らしてます。

ではでは（その３）…
不安を感じるときはどんな時？

将来が見通せないとき（どの大人も幸せに見えない）、信用が崩れたとき（巨大企業も倒産、食べ物も安全じゃない）、自分が認められないとき（いじめ、孤独）、自分じゃなくなるとき（重傷、重病、死）・・まだまだあるかな？

今まで頼りにしてきたもの（その２で考えたもの）が崩れてしまった…そんな時「すっきりする道があるよ」とささやかれると、とっても魅力的に感じてしまいます。あれ？思いっきり引かんとあかんがし～

結局（その４）…大事なことは．

僕たちは理性や科学では解決できない問題を抱えてるってことです。それはいたって普通のこと。人生って？死ぬって？生きるって？これらみんな、とっても大事な宿題だと思います。

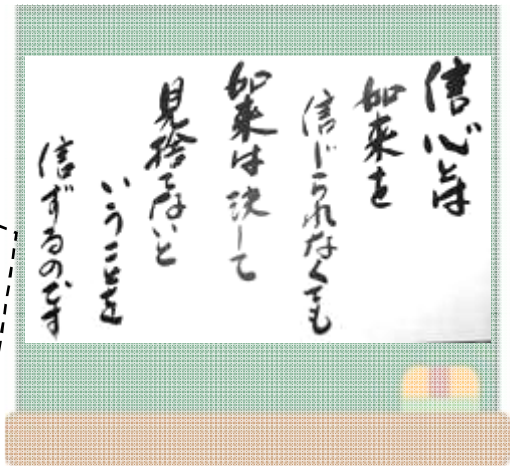
仏教やキリスト教なら安心だ、解決してくれる、それも早とちりです。確かに、解決された先輩はたくさんいらっしゃいます。でも、その人の言葉をうのみにするんでは、あぶない（その１みたいだ）し、ちっとも解決にならんのじゃないかな。

真剣に、全身で、この宿題に取り組むこと、これが宗教だと思います。少なくとも、念仏の教えはそうです。

今回はここまで♪　（編者）

素朴な疑問、お寄せ下さい。

山門掲示板



世界では毎日どこかで戦争や紛争があり、血を流しています。そこには民族や宗教の対立があります。特にイスラムとキリスト教は相いれないものがあります。宗教は自分が正しいという立場に立つと争いの元となり、他者との関係を閉鎖的なものにしてしまいます。

蓮如上人が『御文』の中で、くり返し「たとえ牛盗人といわれようとも仏法者とみゆるようにふるまってはいけない」と戒められるのも、仏法者ぶりをすれば他者を見下し、いさかいの原因ともなるからでしょう。私たちも聞法していくなかで仏法者ぶりをして、家族や他人に嫌な思いをさせることはないでしょうか。

信心はそういう小さな世界を破っていくようなはたらきをするのです。如来のお心にふれたら信心の有無なんか気にする必要のない大きな世界を開くのです。それがお浄土によって開かれていく世界です。（住職）

先輩の感動をたずねて

法蔵菩薩の誓いを説明するために、希有というだけでは足らず、大という字と弘という字までついています。前回は、「無上＆殊勝」と歌われていました。宗祖がこれほど感動されたのはなぜでしょう？

やっぱり、自分とは無関係な話なら、そんなに感動しませんよね。法蔵菩薩の誓いが、直接宗祖の身に触ってきたんじゃないでしょうか。怪しげな神秘主義ではありませんよ。昔話としてじゃなく、現実の生活の根っこに関わることだったんだと思います。

宗祖は、法然上人に出会って、生活の根っこがまるきり逆の人がいることに驚きました。自分は自分を頼りに生きてきたけれど、法然上人は仏を中心に暮らしていたからです。しかも、現実に届く、仏の呼び声を聞きながら暮らしていたのです。（怪しげな神秘主義ではありませんよ）上人は、仏の声に心から懺悔し、喜んで従っておられたと思います。

そしたら、宗祖は、自分まで生活の根っこがひっくり返されたのに気がつきました。あっ自分まで！そう、自分にまで仏の誓いが届いたことに、宗祖は何より驚かれたのではないでしょうか。（編者）

超発希有大弘誓（ちょうほっけうだいぐぜい）

親鸞作『正信念仏偈』より

読み方―（法蔵菩薩は）希有の大弘誓を超発せり
※超発―私欲を超えておこすこと
※希有―有るのが稀な
※大―仏のお仕事の意
※弘誓―ひろい誓い

ご報告

永代経がつとまりました（7月10、11日）

布教使（福井）
奥田順誓師

お説教の言葉

煩悩に眼障えられて
摂取の光明見ざれども
大悲ものうきことなくて
常に我が身を照らすなり

図書紹介

『浄土三部経』現代語版
本願寺出版社
1996年 ¥1260

『浄土三部経(上)(下)』
岩波文庫　1990年
¥798(上)　¥693(下)

法事のお経はちんぷんかんぷん…ですよね。でも、お経が「分かる」ってどういうことでしょう。

例えば、結核という病気は、原因や治療法が分かって、亡くなる人が劇的に減りました。これは分かった例。

でも、人生何が起こるか分かりません。どうしたら思い残すことなく死ねるでしょう。病気や死をどう受け入れたらいいでしょう。お経が分かるってことは、これらが分かるってことじゃないでしょうか。

お経に書いてあるなら読んでみたいという方に、現代語訳をご紹介いたします。２冊をセットで読むことをオススメします。

教えを矮小化するか、ねじ曲げるかすれば、分かったつもりにはなれますが、正直、人生の問題がすっきり分かったとは言えないでしょう。ほんならどうすればいいんやろ…ご安心を。同じように迷われた先輩たちがいます。七高僧を始め、みなさんの身近にもきっとおられますよ。その方を通してお経のこころをたずねましょう。

発　行

真宗仏光寺派 専念山 西雲寺

住職　護城一寿
筆頭総代　鈴木春夫
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お手元に２部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声　大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。